**令和３年度　第２回北海道Society5.0推進会議　開催概要**

１　日　　時

　　令和４年２月７日（月）13:30 ～ 15:30

２　実施場所

　　ホテルポールスター札幌　４階　ラベンダー

３　出 席 者

　　別添「出席者名簿」のとおり

４　議　　題

　　別添「次第」のとおり

５　議　　事

　(1) 議事１　会議の進め方

|  |
| --- |
| ・事務局（北海道）から説明（資料１） |

　(2) 議事２　令和3年度の取組について

|  |
| --- |
| ・事務局（北海道）から説明（資料２－１、２－２、２－３）  【ワーキングリーダーの意見】  ＜データ利活用ワーキンググループ＞   * 公開可能なものはデジタル化されたデータですべてオープンにするのは重要なこと。 * データをどう利用するかと、どう利用したいか、そのサイクルがまわっていかないと進んでいかない。 * データを基本的にはオープンにする前提に業務を切り替える。そのために道庁でデータの棚卸ししながらどう進めていくか。それがデータを利用していく最初のひと転がりになる。   ＜デジタル人材育成・確保ワーキンググループ＞   * 必要なデジタル人材のスキルは、立場によって変わる。それを前提としてロードマップを作成した。 * 高校では情報Iが必修化され、すべての高校生がITリテラシーを学んでくる。それを受け入れる社会としてどういったスキルを定義したら良いかを議論した。   【委員からの意見】   * デジタル人材について、人がいないという問題と、外から人を入れたからといって取組が進むわけではないという二重につらい状態。人がいなくてもやるんだという考え方を浸透させて行くことも大事。 * 実はDX人材がいるというケースも多く、それを管理職が止めていることがある。管理職を含めて多くの人のマインドセットを変えるということをやるべき。 |

　(3) 議事３　令和4年度の取組について

|  |
| --- |
| ・事務局（北海道）から説明（資料３）  【委員からの意見】   * 何が達成されたらうまくいったのかがわかりづらい。 * 計画のKPIは大きな目標。それに対して各取組がどう繋がっているのか、どういう成果が得られれば、うまくいったといえるのか、得られなかったどう反省すべきか、KPIやアウトプットを明示することで学びが生まれる。 * インパクトチェーンという考え方がある。インプット、アクティビティ、アウトプット、アウトカム、インパクトの5ステップで計画を整理すると、達成されたときにどうなるのかがイメージしやすい。 |

　(4) 議事４　意見交換

|  |
| --- |
| ・事務局（北海道）から説明（資料４）  【委員からの主な意見】  ＜北海道Society5.0の推進について＞   * 道民の生活がどうなるのかという絵がこれだけでは弱いと感じた。 * 国のデジタル田園都市国家構想の補助金（交付金）を活用してデジタル化を進めていただきたい。 * 色々な自治体や企業で「やってみた」というのが令和3年度の取組例。この中から「これは世の中を変えるね」というのが出てきて、本当に社会に実装されるのが令和4年度以降。令和3年度の取組はしっかり伝え、ぜひ、その中から実際に社会に実装をする例を北海道で出していきたい。 * 山頂は何なのか、要は、北海道Society5.0って、具体的には何なの？どういう社会なの？というのを、もっと具体的に描くということ。 * あまりHowの話はせずに、ゴールの話をしっかりするべきだと思う。もう少し未来の解像度を上げるというところにも、時間をしっかり使って、対話の量を増やした方が良い。 * 高齢化する農業で、どうやってこの先食糧の安定供給をしていくか考えたときに、北海道Society5.0は今まだスタート段階なので、どういう形で進めていくか、そのゴールがまだ我々には全く見えてこない。 * 農業のDXに関する実証実験も進んでいるが、使いやすく生産効率を上げ、安定的に消費者に届けることにつながっているか、精査をしながらDX化を進めていけば、農業者も取り組みに入りやすくなるのではないか。 * 岩見沢では実際の市民と目的を共有して、それに向けてチャレンジし、その結果として、例えば農家の方は生産効率や所得が上がるということが数字的に見え、それがエネルギーになって、またチャレンジをしていこうという風につながっている * 少子化によって我々に1時間と若者の1時間の価値が全然違う。若者時間を貴重に使うことが大事。 * デジタルネイティブにしか理解できないところから挙がってくる提案というのは重要。トップは理解しなくても、若者の提案を止めないということが非常に重要。 * ロードマップを2025年まで引いており、そこから飛んで2030年があるが、もう少し具体的に、私たちの北海道、2030年がこうありたいんだという形が見えると、KPIなども作りやすくなっていくのではないか。 * 目指すべきは、デジタルを使ってどうやって市民生活が良くなるか、産業がいかに円滑に回って、皆さんの利益が上がるようにするか。 * 働く人口が減少し、地域のコミュニティが破綻するということにつながってくるというのが我々農業者の大きな懸念。ITを使って、北海道の隅々まで地域コミュニティの維持をするという形の考え方を持つことで、農業者としては非常に使いやすいITの推進になる。 * DXっていうのは、ITインフラというものが社会の一番底辺、ボトムにあって、それに社会が乗るもの。従来は、ITが上の方に浮いていて、下の方は土建的なものがインフラだった、これが逆転するのが本質だと思っている。   ＜デジタル人材育成・確保ワーキンググループ＞   * 定量的な目標をしっかり設けて、それに対し2022年はこういうことをやっていくというマイルストーンが必要。 * 経営層がやろうと決めることが一番大事と感じている。特に中小企業は、経営者自らDX担当者となり進めることがポイントとなっている。 * （DXの）他社の事例を発信していく方が良い。札幌商工会議所でも「生産性向上事例紹介セミナー」を2ヶ月に1回定期開催している。 * プログラミング教育を受けている小学生向けに、IT企業で実際にどのようにプログラムを開発しているのか、IT関連の業務の流れを体験してもらうことで将来を考えるきっかけとなる。 * 目標設定に関して北海道らしいところでいくと、地域課題の解決を図れる人材育成、この辺を具体的に来年度、事務局と調整しながらまた議論をしていく。 * 自社の中にITに詳しい方を作るというのはなかなか難しいところもあるので、ノウハウのあるIT企業も十分利用することを考えていただけたら良い。 * 管理職が失敗しないようにと良かれと思って止めているケースは実際にある。そこは失敗しても良いからやってみろと言える幹部をどれだけ作れるかっていうことは非常に大事。 |